

C年復活節第7主日 ヨハネ17章20―26節

〔直訳〕

20 だが、これらの者たちに関して、私は願うだけで、

そうではなく、信じる者たちに関して、彼らの言葉を通して、私を、

21 ようにと、すべての者が一つである、

とおりに、あなたが、父よ、私の中に、私も、あなたの中に、

ようにと、彼らも、私たちの中に、ある、

ようにと、世が信じる、次のことを

あなたが私を遣わした。

22 私も、栄光を

ところの、あなたが与えた、私に

与えた、彼らに、

ようにと、彼らがある、一つで、

とおりに、私たちが一つで。

23 私が、彼らの中に、そして、あなたが、私の中に、

ようにと、彼らがある、完全なものにされていて、一つの中へ、

ようにと、知る、世が、次のことを

あなたが私を遣わした。

そして、あなたが愛した、彼らを

とおりに、私を、あなたが愛した。

24 父よ

ところの者、あなたが与えた、私に、

私は望む

ようにと、所に、いる、私が、その者たちも、いる、私と共に、

ようにと、彼らが見る、私の栄光を、

ところの、あなたが与えた、私に

ということ、あなたが愛した、私を、世界の始まりの前に。

25 父よ、正しい方よ、

そして、世は、あなたが、知らなかった、

だが私は、あなたが、知った、

そして、これらの者は、知った、次のことを

あなたが私を遣わした。

26 そして、私は知らせた、彼らに、あなたの名を、そして、私は知らせるだろう、

ようにと、愛は、ところの、あなたが愛した、私を

彼らの中に、ある

わたしも、彼らの中に。

〔新共同訳〕

20 また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、願います。21 父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。22 あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。23 わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります。24 父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです。25 正しい父よ、世はあなたを知りませんが、わたしはあなたが知っており、この人々はあなたがわたしを遣わされたことを知っています。26 わたしは御名を彼らに知らせました。また、これからも知らせます。わたしに対するあなたの愛が彼らの内にあり、わたしも彼らの内になるためです。」

①構成

① a 20—21節

「これらの者たち」は神がイエスに与えた人々、イエスの直弟子を指している。イエスは彼の直弟子の言葉によって信じる者たちのためにも祈る。「すべて者が一つであるように」とイエスは願う。「一つである」とは「私の中に父が、私もあなたの中にあるとおりに」、「彼らも私たちの中にある」ことを意味する。その結果、「世」は「あなたが私を遣わした」ことを「信じる」ことになる。

① b 22—23節

第一段落に用いられた「一つである」「とおりに」「世」「あなたが私を遣わした」がここにも現れる。第一段落では神がイエスを遣わしたことを「世が信じる」と述べられているが、ここでは「世が知る」ようになる」と表現されている。また「あなたが私を遣わした」ことは、イエスを愛する父の愛の現れであることが示されている。

① c 24節—26節

この段落にも「世」「知る」「あなたが私を遣わした」が用いられている。「私はあなたを知っている」とは挿入であり、神を知らない世の罪深さを強調する意味合いがある。23節では「愛する」という動詞を用いて、神がイエスを愛したとおりに信じる者を愛したことが述べられているが、神の愛は26節でも言及され、「愛は彼らの中にある」と言い換えられている。

②すべての者が一つであるように（20—21節）

① a ヨハネ福音書17章は「イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた」で始まることから分かるように、イエスの祈りであり、しかも章の終わり（26節）まで途切れることなく続く。

9節には「彼らのためにお願いします」とあり、イエスから直接教えを聞いた直弟子のための祈

りが19節まで続く。20節からは、その直弟子たちのためだけでなく、直弟子の言葉によってイエスを信じるようになる者たちのための願いが述べられている。

⑥ イエスを信じる者すべてが「一つである」ことをイエスは祈っている。信じる者の「一つである」というあり方は「中に」という前置詞によって表される。「あなたが私の中に」「私もあなたの中に」とあるように、神とイエスは一体である。そのあり方に信じる者もあずかる。「彼らも私たちの中に」あることによって、世は神がイエスを遣わしたことを信じるようになる。

③ 栄光を与えた（22―23節）

④ 22節の「栄光」は、この文脈では「御名」「神の言葉」「真理」と同じ意味で用いられている（6・8・11・12・14・17・19節）。イエスは神から与えられた栄光を信じる者に与えた。その目的は「父とイエスが一つであるように、彼らも一つである」ためである。「一つである」であることは、23節でも「中に」という前置詞で表されている。23節では、さらに「完全なものにされていて、一つの中へある」とも述べられており、一体性が強調されている。栄光を与えるというイエスの業によって、人は父とイエスと完全に一つになっていく。

⑤ イエスを信じる者が父なる神とイエスと完全に一つであることによって、世は神がイエスを遣わしたことを、さらに神の愛を「知る」ようになる。23節では21節の「あなたが私を遣わした」を繰り返した後に、「そしてあなたが彼らを愛した」と述べて、神がイエスを遣わしたのは、イエスが受けている神の愛を人々に現すためであることが示されている。

⑥ ここでの「知る」には「知り続ける」という含みがある。ヨハネ福音書では「世」はイエスを拒絶する者たちを表す。1章10節には「世は言を認めなかった（知らなかった）」とあり、11節には「民は言を受け入れなかった」と述べられている。10節に用いられている動詞は「知る（ギーノースコー）」であり、23節と25節の「知る」も同じ動詞である。1章10節と11節に示されているように、ヨハネ福音書が述べる「知る」とは知識ではなく、対象を受け入れるという姿勢を含んでいる。イエスが神から遣わされた者であり、神の愛を現す者であることを世が知り、イエスとの関りを持ち続けることをイエスは願っている。

④ 私がいる所に、私と共にいる（24節―26節）

⑦ イエスを信じる者は「あなたが私に与えた者」である。その者たちは「イエスがいる所にイエスと共にいる」という救いに招かれる。ここでは、イエスと信じる者とが一体であることが「共にいる」という言葉で表される。イエスと共にいるのは、世の始まる前からイエスが神のみもとで持っていた栄光を見るためであり（5節）、「イエスの栄光」は神とイエスが一体であること、神がイエスを愛していることを示している。

⑧ 25節では「父よ」と呼びかけた後に、「正しい方よ」と呼びかけを重ねる。この呼びかけに続いて、「世はあなたを知らなかった、私は知っていたが、そしてこれらの者は知った」と述べている。このように述べることによって、神を知り神との交わりの中で生きる者の正しさと正しい神を知らなかった世の罪が対比されている。

⑨ 22節では「私も栄光を彼らに与えた」と述べられているが、26節では「私はあなたの名を彼らに知らせた」と言い換えられている。イエスは神の名を知らせ、これからも知らせる。それはイエ

スに与えられた神の愛が信じる者の中であり、イエスが彼らの中にあるためである。

⑤世が世でなくなるために

①告別説教（一三31—一六33）に続く、ヨハネ福音書17章は「大祭司の祈り」と呼ばれることがある。神と人との間に立ち、とりなしを願う大祭司のように、イエスは世に残される弟子のために祈っている。世に遣わされたイエスは業と言葉によって御名を世に示したので、イエスが「みもとから出て来たことを本当に知り」、神がイエスを「お遣わしになったことを信じた」人々も現れ、神の栄光を知った人が生まれた。しかし、「父よ、時が来ました」（1節）とイエスが述べ「今」は十字架に上るべき時である。十字架は神の栄光を端的に示す出来事である。それは闇に消える死ではなく、栄光の神のもとに戻る凱旋だからである。

②イエスは9節で「彼らのためにお願いします」と祈るが、ここでの「彼ら」はイエスの直弟子である。イエスは彼らのために「聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください」と祈る（11節）。彼らは世に残されるが、世は彼らを憎んでいる。なぜなら、イエスが「世に属していないように、彼らも世に属していない」からである。イエスは彼らを世から取り去るようには求めず、守ることを願う。それは、「わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わした」からである。神がイエスを世に遣わしたのは、3章16節に「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が：永遠の命を得るためである」とあるように、世に愛を示すためである。神は背く世を捨て去ることができずに、イエスを遣わして、命への道を示した。イエスの直弟子が世に残されるのは、イエスの業を受け継ぎ、世に神の愛を示すためである。

③20—26節では、直弟子の言葉によってイエスを信じる者となる人々のために、イエスは「あなたの中に、私があなたの中にあるとおりに、すべての者が一つであるように」と祈る。それは世が「あなたが私を遣わした」ことを「信じるため、知るため」である。イエスが神から遣わされたこと、神が人を愛したことを世が信じ、知ることをイエスは祈る。「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」（3節）とあるように、今は敵対し、イエスの言葉を聞くことができない世が変わることを、世が「永遠の命」にあずかる者となることをイエスは祈っている。

④20—26節では世に関して「知る」と「信じる」が用いられているが、この二つの語は1—8節にも用いられている。ただし、1—8節では「知り、信じた」のはイエスの業と言葉に触れた直弟子である。彼らは、イエスに与えられたものはすべて神からのものであることを知り、イエスが神のもとから来たことを知り、「あなたが私を遣わした」ことを信じた（8節）。神は彼らを「世から選び出して」イエスに与えたのである（6節）。イエスの直弟子もかつては世に属していたが、「今は」イエスが誰であるかを知って、世に属さない者となった。

⑤イエスの直弟子は「世」に残されて、イエスの使命を受け継ぐことになる（9—19節）。直弟子はイエスの業と言葉を伝え、彼らの言葉によって信じる者が生まれる。直弟子も次の世代も、イエスを信じる者すべてが一つとなり、神とイエスとの交わりに生きていることを示すとき、世は直弟子と同じ道をたどり、「知って、信じて」世から離れることになる。イエスの使命は「世を世でなくす」ことである。